

カリキュラム開発と人的支援を通して、どのクラスでも質の高い授業を展開

東京都武蔵村山市

2009年度から小学1～6年生で英語活動をスタートさせた武蔵村山市では、2015年度から文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、拠点校の小・中・高が連携してカリキュラムや教材の開発を進めている。小学校高学年の英語を年間70時間の教科として先行実施し、英語4技能を伸ばすカリキュラムを作成するなど、今後の英語教育の方向性を見据えた取り組みを紹介する。

武蔵村山市教育委員会の施策

小・中・高が連携したカリキュラム開発や、英語活動支援員の配置で、英語教育の充実を図る



教育長 持田浩志 もちだ・ひろし

出版社勤務後、公立小学校の教員に。文京区立誠之小学校校長等を経て、2007年から現職。

東京都武蔵村山市プロフィール

◎新宿から西に約30kmのところに位置する同市には、北部に自然豊かな狭山丘陵が広がり、西部に米軍横田基地がある。1960年代以降、住宅都市として発展。

人口 約7万人 面積 15.32km²

公立学校数 小学校9校、中学校5校

児童生徒数 6,752人

電話 042-565-1111

URL <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/kurashi/kyouiku/>

施策の経緯

小中一貫教育をベースに早くから英語教育に注力

1996年度からJETプログラムによるALTを中学校に常駐させるなど、いち早く英語教育の充実を図ってきた武蔵村山市は、2008年度に武蔵村山市立第九小学校が文部科学省の研究指定を受けたのを機に、市全体の小学校英語の充実を目指すことにした。持田浩志教育長は、そのねらいを次のように語る。

「本市の西部には米軍横田基地の一部があるため、外国人と触れ合う機会が比較的多く、また、グローバル化が進む中、早い時期から英語教育を充実させたいと考えました」

まず着手したのは、小学校全学年分のカリキュラム作成だ。2009年度には試行版を用いて市内全小学校の全学年で英語活動を開始。そして、実践と改善を繰り返しながらカリキュラムを改訂し、2012年度に完成させた。その特徴は、早くから

取り組んでいた小中一貫教育を土台として、小・中9年間を低学年部（1～4年生）、中学年部（5～7年生）、高学年部（8・9年生）に分け、指導に系統性を持たせたことだ。

学習内容は、同市の小中一貫教育の柱である「言語力」「情報リテラシー」「キャリア教育」「心の教育」に関連づけた。例えば、キャリア教育と関連させて将来の夢を英語で発表する活動を行ったり、心の教育の一環として英語で気持ちを伝え合う活動を取り入れたりしている。

英語教科化に向けた取り組み

文部科学省の研究指定を受け拠点校でカリキュラムを開発

2015年度には、武蔵村山市立第三中学校・第三小学校・雷塚小学校と市内にある東京都立上水高校の4校が、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の研究指定を受けた。

拠点校の2つの小学校では、次期学習指導要領を見据えて、2016年

*プロフィールは2017年3月時点のものです。

度には、年間の英語活動の時間数を低学年は20時間、中学年は35時間、高学年は70時間に拡充させた。そして、4校が一体となった研究体制を組織し、小学校の学年主任と中・高の英語科教員が、英語活動支援員、ALTとともに、小学3年生から高校3年生までのカリキュラム作成や教材開発を行った。特に、小学校高学年のカリキュラム作成では、教科化を見据えて「読む」「書く」を含む4技能を伸ばす年間指導計画(図1)を作成した。

また、英語指導の経験が少ない教員でも安心して授業が行えるよう支援体制も整備した。特に人的支援を重視し、小学校では全学年でチーム・ティーチング(TT)を実施(写真)。T1の学級担任が質の高い授業ができるようにするとともに、T2からクラスルーム・イングリッシュなどを自然と学べるようにした。

中でも重要な役割を果たしているのが、2008年度に導入した「英語活動支援員」だ。市内で公募し、現在は10人が各小学校に常駐して、T2に入る。ほぼ全員が日本人で、日本と外国両方の文化を理解しているため、その違いを踏まえてコミュニケーションでき、英語指導経験者を採用しているため、単元構成や授業づくりの面でも大きな力となっている。また、「英語教育強化地域拠点事業」により第三中学校に加配されている英語科教員も、頻繁に小学校に来て、授業の支援をしている。



写真 学級担任をT1、英語活動支援員やALT、中学校の加配教員をT2とするTTによる授業が多い。

図1 小学校英語活動 年間指導計画の例 (第三小学校の6年生から抜粋)

6年生 70時間 英語科 (モジュール20時間)

		単元名	使う表現	語彙	『Hi, friends!』との関連
1学期 15時間	3時間	気持ちをこめてあいさつをしよう	Hello. Good morning. How are you doing? I'm hungry. My name is ~. It's sunny today. Nice to meet you.	あいさつ、天気、気持ちや様子を表す語、ほめ言葉	1-L1 1-L2
	4時間	「できること」を伝え合おう	I play basketball. Can you play baseball? Yes, I can. No, I can't. I can play the piano.	スポーツ、楽器、動作	2-L3 2-L6
	4時間	村山のまちを探索しよう	Where is the school? Go straight. Turn right/left. Stop. Here is the school.	建物、方角・動作を表す語	2-L4
	4時間	日光ガイドブックをつくらう	Where is Nikko Toshogu? How much? Ten dollars. Excuse me. Sorry.	数、日光の特産物や名所	2-L4

*武蔵村山市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。

成果と展望

2018年度の全校実施に向け拠点校の実践の拡大を図る

拠点校の小学校では、TTに支えられて、担任が英語の指導に積極的になり、どのクラスでも一定水準以上の授業を展開するようになった。それに伴い、子どもの英語に対する意識も向上し、小学3~6年生へのアンケート調査では、「英語が好き」「英語が使えるようになりたい」と答えた子どもが8割を超えた。

「拠点校の小・中学校とも、学力調査では学力の向上が見られます。ただ、中学校に進学すると、『英語が使えるようになりたい』という子どもの割合は増加するものの、『英語が好き』という子どもの割合は減少傾向が見られます。小・中・高を見通した言語活動の充実を一層図っていく必要性を感じています」(持田教育長)

同市では、2018年度から全小学校の高学年で、年間70時間の教科「外国語」を先行実施する予定だ。とはいえ、各校には英語指導に苦手意識を持つ教員がまだまだ多く、市全体に拠点校の実践を広め、教員の研修体制を充実させることが課題だ。

そのため、各拠点校が年1回授業

公開を行うとともに、毎年実施される「授業実践研究会」の英語部会に市内の全小・中学校が参加して、各校の指導状況を共有する。また、文部科学省の中央研修や、文部科学省や東京都が行う海外派遣研修にも教員を積極的に派遣。2016年度には中央研修を受けた英語教育推進リーダーによる研修を実施し、市内の全小・中学校から教員が参加した。さらに、英語教育推進リーダーは、自身の授業公開や学校訪問を積極的に行い、すべての学校の授業が一定水準に保たれるように支援している。

授業時数に関しては、拠点校の実践を基に、モジュール学習や「完全午前5時間制」*1を導入し、さらに行事の精選などを行って、2017~2018年度の2年間をかけて授業時数を確保していく予定だ。

「小学校英語の教科化を文部科学省に言われたからやるのではなく、子どもの実態を見取った上で、子どもに何をすべきか考えて行うことが大切だと思います。今後は、パフォーマンステストやGTEC for Students*2を実施するなどして到達度を定期的に把握し、年間計画や指導改善に反映させることで、4技能の定着を図っていく予定です」(持田教育長)

*1 1時限のスタートを早めて、午前中に5時間の授業を実施する制度。第三小学校では、1時限を8時15分から開始し、5時限の後、12時35分から給食を開始している。
*2 ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」の3技能を測る。さらに、「Speaking(話す)」をオプション受験することで、4技能を測ることも可能。

活動中心の取り組みで英語への興味・関心を高め、「読む・書く」を含めた英語力を向上させる



© 1998 (平成 10) 年に 2 校が統合して開校。文部科学省、東京都教育委員会、武蔵村山市教育委員会から合計 11 の研究指定を受けている。

校長 井内 潔先生
 児童数 427 人
 学級数 19 学級 (うち特別支援学級 6)
 電話 042-561-1775
 URL <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/school/mmcedrs/>

カリキュラムの工夫

言語活動の中で読み書きへの意欲を高める

2015年度、小学校英語の教科化に向けて「英語教育強化地域拠点事業」の研究指定を受けた当初、武蔵村山市立雷塚小学校には戸惑いがあった。井内潔校長はこう振り返る。

「外国語活動は、それまで英語活動支援員やALTが中心となって進めていました。それが、教科化により担任中心の指導となり、また授業時数も増えるため、何から始めればよいのかというのが率直な思いでした」

本事業では、同校に大きく3つのテーマが課されていた。①授業改善と年間指導計画 (CAN-DOリスト含む) の作成、②教材活用と効果検証、③授業時数の確保だ。

年間指導計画は、同市の英語のモ

デルカリキュラムを土台に、英語活動支援員の山下直子先生と話し合いながら試行錯誤で組み立てていった。現在も、中学年は活動型、高学年は教科型で授業改善に取り組むとともに、年間指導計画や評価計画自体も見直しと改善を進めている。

指導で大切にしているのは、子どもが意欲的に取り組む言語活動の中で4技能を育てていくことだ。言語活動では、文部科学省『Hi, friends!』を活用した「聞く」「話す」活動を中心としつつ、一部、独自に作成したカードなどを用いた「読む」活動を行い、キーフレーズに十分に慣れ親しんだ後で、それを書き写す学習を取り入れている (図2)。読み書きについては、アルファベットが読める・書けることと、ごく簡単な単語や文章を書き写せることを目標とした。

『「聞く」「話す」「読む」という活



校長
井内 潔
いうち・きよし

公立中学校 (技術・家庭科) 教諭、教育行政職、副校長を経て、現職。



主幹教諭
野田 喜嗣
のだ・よしつぐ

5学年担任。2015年度、校内研究、学校行事の推進により、文部科学大臣表彰を受賞。



英語活動支援員
山下直子
やました・なおこ

民間企業勤務を経て、現職。

動を通して、子どもの『書いてみたい』という意欲を十分に高めてから書く活動を行っています。活動と切り離して、単語を読んだり書いたりする学習は行っていません」(山下先生)

そうした工夫もあり、子どもたちの「読む」「書く」活動への関心は高い。子どもへのアンケート結果では、「読む」「書く」に興味があると答えた子どもは、5年生では83%、6年生では90%に上り、授業でも前向きに活動する姿が見られるという。

図2 小学3～6年生の英語の言語活動例

学年	言語活動のテーマ例	キーフレーズ	やりとり
3年	世界に一つだけの動物園を作ろう!	How many ~ ~, please	数詞や名詞を使って簡単な単語・連語でやりとり
4年	感謝の気持ちを花束で伝えよう	I want ~. How many ~ do you want?	数詞や名詞に形容詞も加えて、短い文を使ってやりとり
5年	ランチを注文しよう	What would you like? I would like ~.	相手や場面に応じて丁寧な言葉でやりとり
6年	おすすめの国を紹介しよう	You can watch/eat/see ~	調べたことを相手に分かりやすく発表

*雷塚小学校提供資料を基に編集部で作成。

*プロフィールは2017年3月時点のものです。

授業の工夫

週1回のモジュール学習も活動を中心に展開

授業づくりでは、子どもの学習意欲を高めるために、英語を使う必然性のある場面設定を重視している。

例えば、主幹教諭の野田喜嗣先生は、担任を受け持つ5年生で英語と図工を連動させた活動を行った。

「英語の授業でALTに校内を案内するという課題を提示し、そのために、図工の授業で各教室に貼る英語の看板を作るという活動を行いました。子どもたちは、いつも以上に生き生きと取り組んでいました」

また、6年生の英語の授業には、週1回、中学校の英語加配教員がT2として入る。小・中の教員が指導の目線合わせをすることで、小・中の接続がスムーズになるだけでなく、相互により影響を与えている。

例えば、中学校教員から、中学生でも4線の中にアルファベットがなかなかうまく書けないという話を聞き、小学校では卒業までにアルファベットの大きい文字・小さい文字を4線の中にきちんと書けることを目標の1つとし、意識的に取り組ませるようにした。見本単語の横に練習欄があると書き取りがしづらい子どもが多かったため、見本単語の下に練習欄を設けるといった工夫もしている。

一方、中学校でも、教員の派遣はこれから入学してくる子どもたちの実態が分かるというメリットがある。また、小学校の活動内容を参考に、授業に歌などの活動を取り入れたり、宿題に音読を取り入れたりしている。

授業時数は、2016年度から、高学年での英語の授業70時間*1のうち12時間分をモジュール学習（15分×36回）として確保した。モジュール学習の年間指導計画も作成し、週1回、朝学習の時間に、東京都が作成した教材『Welcome to Tokyo』*2などを活用した活動を行う。

「モジュール学習でも、5年生前半でアルファベットの学習を行う以外は、基本的に『聞く』『話す』活動が中心で、15分間の中でもしっかりとめあてを持ち、コミュニケーション

をしたり、視聴覚教材を活用したりしています」(野田先生)

成果と展望

教員の指導力が高まり、子どもの英語力も向上

当初は多くの教員が英語の指導に不安を抱いていたが、今はどの教員も積極的に英語の授業を行っている。そうした変化の要因として、英語活動支援員の山下先生の支援が大きいと、井内校長は説明する。

「山下先生は、初任者の支援を手厚く行うなど、臨機応変に授業や授業づくりのサポートをしてくれています。事前に山下先生と授業の流れを綿密に打ち合わせた上で授業に臨めるので、先生方は安心して授業が行えますし、経験を積むごとに授業の流れが身につく、自信を深められます」

例えば、1学期には英語の授業に

苦手意識のあった若手教員が、経験を積んだことで、2学期には楽しく授業できるようになった。また、同校で英語の指導を経験した教員が、異動先の学校で「すごい授業をしている」と感心されたこともあるという。

英語教育が充実するにつれて、子どもたちの英語力も着実に伸びている。2016年度には、英語の外部検定試験で9割の子どもが目標点を超えた。また、小中接続がスムーズになったことで、いわゆる中1ギャップが減り、「新入生の英語の『聞く』『話す』力が素晴らしい」と、中学校側から報告を受けているほどだ。

「読み書きの学習をしても、『英語は楽しい』という気持ちのまま、子どもたちを中学校に送り出すことが大切だと思います。今後は本事業の最終年度として、小・中・高の連携を強化し、さらなる指導力向上に努めていきたいと思っています」(井内校長)

「英語教育強化地域拠点事業」の各拠点校の取り組み

同市で「英語教育強化地域拠点事業」の研究指定を受けている4校は、小・中・高の連携強化に積極的に取り組むとともに、各校で特色ある活動を進めている。

◎武蔵村山市立第三小学校（前川潤校長）

雷塚小学校と同様に、高学年は教科型、中学年は活動型のカリキュラムを作成。授業前の打ち合わせ時間を確保するなど

の工夫をしている。また、授業時数の確保の工夫として、モジュール学習のほか、特別時程の「水曜午前5時間制」も取り入れる。米軍横田基地内にある小学校との交流、バヌアツ共和国の小学校とのスカイプを用いた交流などにも取り組む。

◎武蔵村山市立第三中学校（栗原伊知郎校長）

文部科学省の中央研修や東京都の海外派遣研修などに教員を派遣し、さらに小学校や高校との相互の授業見学などにも力を入れ、指導力の向上を図る。また、「総合的な学習の時間」の一部を「国際科」として年間計画を作成し、国際交流プログラムなどを行っている。海外派遣教員による『ALL ENGLISH 講座』も実施。

◎東京都立上水高校（下田賢明校長）

授業公開を実施するほか、小・中学校への英語教員の派遣、小・中学校への指導法の助言などを通して拠点校における目線合わせを図る。また、同校が開催する英語スピーチコンテストへの第三中学校の生徒の受け入れも実施している。



「英語教育強化研究推進委員会」では、様々な連携の提案が活発に行われていた。

ご案内

平成27～29年度 文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」研究発表会

日時 平成29年11月2日（木）13時30分開始 会場 武蔵村山市立雷塚小学校

内容 短期間学習、小学校1年生～高校1年生の公開授業、文教大学金森強教授の講演

*1 45分授業の58時間のうち23時間については特例を活用して、「総合的な学習の時間」や余剰時間から補填している。

*2 東京オリンピック・パラリンピック教育の一環として製作され、都内公立小学校5年生以上の全児童生徒に配布。